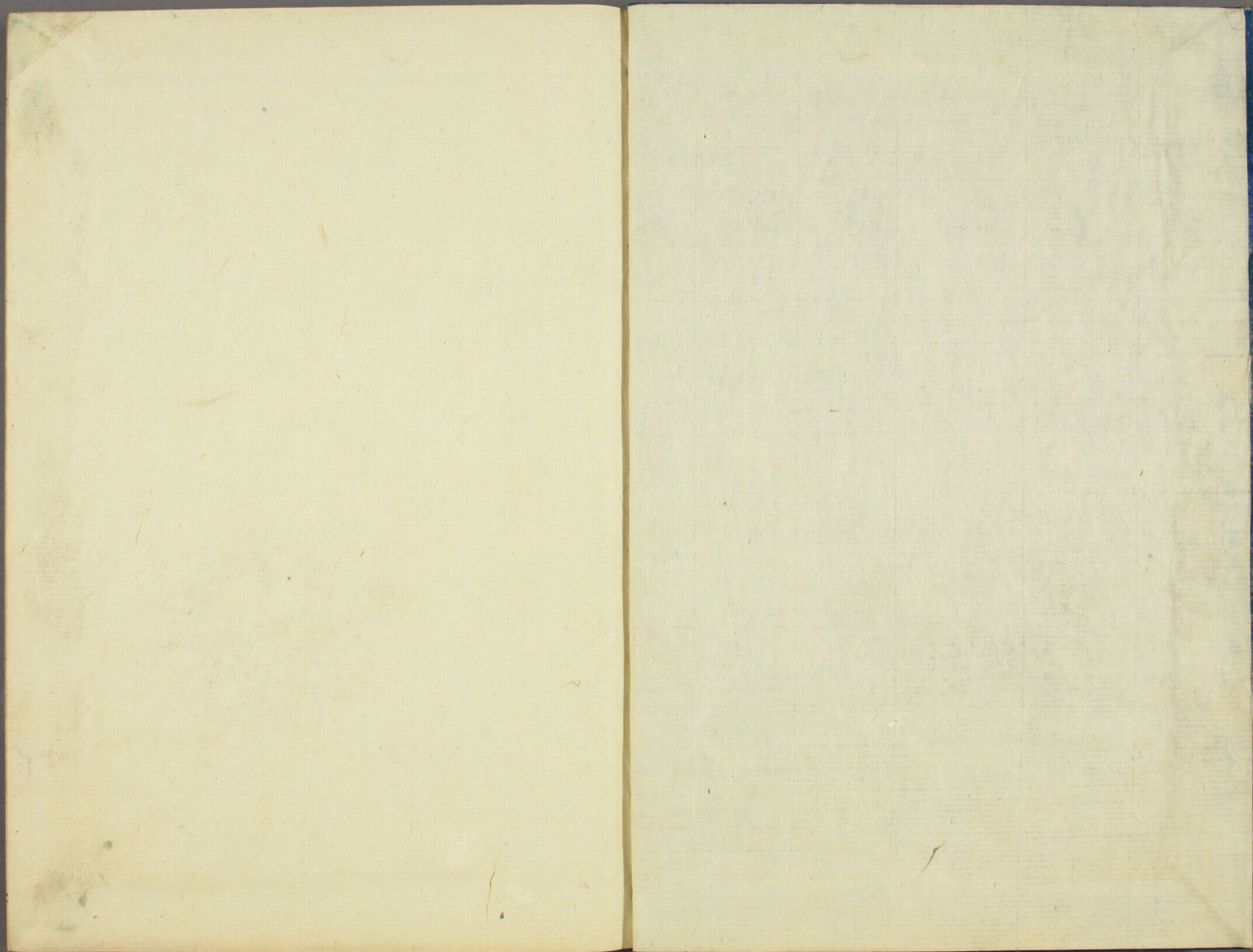




源氏物語繪釋

二





○語
叙



例の暗記の語を...
てふひして俗よりイダメルといふよりあつてもなり

ちんちん

十丁 河 ちんちん...
才 新 ねんちん 古今

かまひのあつたやのよき...
物持の申ふ後らうりといふ俗あま...
あつてもなり

か又あつたあつたの衣あ...
形容辞 あつてもなり
あつてもなり

かげりか日記よ人のあつた...
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

あつてもなり
あつてもなり

〇詰 叙

あつてもなり
あつてもなり

オレオホイ... 拾和名抄云篇云... 九丁湖... 十六丁拾無言...

拾和名抄云篇云... 九丁湖... 十六丁拾無言... 進退兩...

十一丁湖... 十二丁湖... 十三丁湖... 十四丁湖... 十五丁湖...

十六丁湖... 十七丁湖... 十八丁湖... 十九丁湖... 二十丁湖...

二十一丁湖... 二十二丁湖... 二十三丁湖... 二十四丁湖... 二十五丁湖...

二十六丁湖... 二十七丁湖... 二十八丁湖... 二十九丁湖... 三十丁湖...

所許言垂仁天皇卷又曰棲遑不知其所... 此事秘説有孟河...

十二日於議定所講讀の時此中を... 新... 河日本紀曰唯咽進退一泣懷悒...

あやな... 十七丁餘... 十八丁餘... 十九丁餘... 二十丁餘...

あやな... 十七丁餘... 十八丁餘... 十九丁餘... 二十丁餘...

あやな... 十七丁餘... 十八丁餘... 十九丁餘... 二十丁餘...

あやな... 十七丁餘... 十八丁餘... 十九丁餘... 二十丁餘...

の會式は引青馬式を載りし水鏡弘仁二年正月七日の御覽青馬と記さるるに中間寮
 多しと云ふは紹運録儀天皇の御覽弘仁二始見青馬と記さるるに中間寮
 載りし仁明天皇の御覽承和元年正月壬子朔戊午始御豐樂殿觀青馬宴群臣と記
 されしに始見青馬と記さるるに中間寮
 然而用二十一匹者三七之義也三陽之義之由見寛平御記まづ年中行事秘抄小
 帝王世記云高辛氏之子以正月七日恒登崗命青衣人令列青馬七匹調青陽之
 氣馬者主陽青者主春崗者万物之始人主之居七者七曜之微陽氣之温始也
 命小常毛見苗青支馬見太万閑退止為豆奈毛云々弘仁内裏式内裏儀式和名抄は雨
 雅注云茨雖今按茨者蘆初生也吐取反俗云葦毛是也青白如茨色也とある毛色は
 白馬毛付奏文も葦毛と記し例をかりて青といひ葦毛といひ毛色を
 又或ハ青鷺毛といひ青といひ今俗ハ青毛といひ古ハ青毛といひ今俗ハ水青といひ
 ぞ當るべしと記さるるに今俗ハ青毛といひ古ハ青毛といひ今俗ハ水青といひ
 葦花毛といひ今俗ハ青毛といひ今俗ハ青毛といひ今俗ハ青毛といひ今俗ハ青毛といひ
 節會なるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 節會なるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに

あつ白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 馬宴と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 後のゆゑハ皆白馬と記さるるに青馬と記さるるに青馬と記さるるに青馬と記さるるに
 年中行事秘抄は正月七日白馬事十節記云馬性以白為本天有白龍地有白馬
 是日見白馬即年中邪氣遠去不來と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 〇後云此下ありいと妻と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 さて本日の式ハ弘仁内裏式ハ左右馬寮引青馬入自延明門云々度殿庭近衛分配
 前後毎七匹前後寮官人分陣云々出自延秋門訖儀式ハ左右馬寮牽青馬入自延
 政門云々其行列也左近衛左右各五人前行左右馬寮頭次之青馬七匹在中次
 之左右寮先左右各一人次之青馬七匹在中次之左右寮屬左右各一人次之青
 馬七匹在中次之左右寮助左右各一人次之右近衛左右各五人次之江家次舟小
 左右馬頭度次白馬七匹次左右先次白馬七匹次左右屬次白馬七匹次左右助
 次右白馬陣度畢次白馬經殿上前每名門明義門仙華門度御前
 自瀧口出あどと記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 だいめと記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに白馬と記さるるに
 〇未余尺

〇未余尺

新字多天皇の... 例の... 輪臺新樂管絃時連吹青海波此曲昔者平調樂也

青海波

日餘万葉傳

部大田麻呂作詠者小野皇作也... 新三位の人舞... 寛仁四年

かまきりびんご

日ウ河聖主天中天迦陵頻伽聲法華經文句伽陵頻伽在卯

此鳥鳴時音中囀若空無我常樂我淨土也... 細翻譯名義集云此云妙聲鳥大論云在

かゝ人のさ

三丁河或存云う人の神つ

唐樂と云う... 唐樂と云う... 唐樂と云う... 唐樂と云う...

のまき中をが... つけ居ふ... ぎもあ... 河海の式... なる... めてとい... かくの... 日細此樂

清后さびのひても

日細后の地あり

あつた... 后の... 紫明抄... 新の唐樂高麗樂

わらべうんぎうバ右の院ともは従せん河海は引連てり文よハ
七月のよはのそととあつていふもいふもいふもいふもいふもいふも

はらへり

おのひやいふ

卅七丁河伊勢物語二条の院はあつていふもいふもいふもいふもいふも
ウ 氏非はまうていふもいふもいふもいふもいふもいふも

大京やをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
たのひやんちいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
していふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
業のよはもあつていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

〇花宴卷餘釋

菊後のはらへり

一丁河南殿櫻云々延喜御記にも群列櫻樹東頭
才 あり天徳は焼くを康保元年十月

小植らるすかり枯る二年二月小又植らるる二月は花宴あり、二度之宮一八重
明親王家樹一八西京より移植るる中後庭に焼亡は毎度植らるる也湖師拾遺抄云
南殿前庭櫻樹者本是梅也桓武天皇遷都之日所被植也而及承和年中枯失仍
仁明天皇被改樹也云云 河花宴事 延長四年二月十七日御記曰此殿前櫻花
盛閑仰召文人聊開花宴昨暮預令召可候文人今日遣使召常陸大守貞真親王
左大臣々々々有所煩不参申尅常陸大守親王参入同尅仰藏人立倚子東北庇
自北第二間敷菅園座兩三枚於北階南簀子敷為親王納言座櫻樹下鋪座西面
為文人座西尅左衛門督藤原朝臣参即署倚子令召親王藤原朝臣等即参来侍
座仰令召文人即文章博士公紗朝臣民部大輔博文朝臣右中弁大江民部少輔
諸蔭侍内御書所大内記橘正臣以下文章生以上七人参入仙華門著樹下座侍
臣給紙筆仰令献題藤原公紗朝臣進昇殿藤原朝臣座前給之令書題目奏花芳
紅囀珠仰又令上又書奏書之櫻繁春日斜仰以後所上為題又仰令探韻字右近
權少将実頼探韻奉上次親王以下就文章探韻仰清平朝臣元方在衡維時尹甫
等探韻令就進中座于時内藏寮給酒肴中納言藤原朝臣参入仰令探題其後仰
召樂所管絃者四五人時々奏音声以助謳吟及子尅終頭取文章以公紗朝臣為
講師讀詩仰文人等近侍砌下令講其後管絃頻奏吟詠不止仰常陸大守親王彈

〇花余尺

がねてそののちくへそるの初るまはれは其のたふふ初めの本意のうへに中ことされを
 女の身中て人ふことよれりくしき中志とん小徳く思召ふり也保氏の性万中ふおのてかくは
 眼まつくへ細花馬流面白く細く肝流結結流の面をさ、ふふふのれくふあれも女の身中
 とうてふちとるくしき相がしきとる保の性をつくくも珠のあり弄石のありふふのれも女の身
 ぶきまのれくしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 の日本もれくしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 めて物々といひのしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 ぶきまのれくしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 物流の中も結巻はくしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 高の巻くしきとるあれは物々といひのしきとる又保の性も流も其故のうへやわさ
 中ふ等たる
 ぶきま

皇漢洋今古書類自家積年叢書其書目其集
 藏書ニ充棟載車、彫牛、金ナリ、又品位精工價
 程清廉以テ四方君子、愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

東區南久寶寺西四丁目十九番屋敷

政府書林 前川善兵衛

